

# 平成 29 年度 農業技術支援センター試験研究等実績概要

## 1 オオタバコガ及びハスモンヨトウの発生消長調査について

野菜の重要害虫であるオオタバコガとハスモンヨトウの適期防除に資するため、市内3か所（農業技術支援センター、宮前区生産者ほ場、高津区生産者ほ場）にてフェロモントラップによる誘殺数に基づいた発生消長調査を行い、防除適期を検討し、生産者へ情報提供を行った。

(結果)

オオタバコガについては、各地区とも例年と比較して発生が遅く、個体数が増加したのは7月に入ってからであった。その後8月上旬から9月中旬にかけて誘殺数が増加したが、10月の天候の乱れ以降、発生は少なくなり、誘殺数が減少した。3か所の誘殺数の合計は734頭であり、昨年と比べ219頭の減少となった。

ハスモンヨトウについては、各地区とも8月に入ってから個体数が増加し、10月上旬まではほぼ例年どおりの発生であった。その後はオオタバコガ同様、10月の天候の乱れ以降発生が減少し、10月中旬以降の誘殺数は例年と比べて少なく、11月中旬以降は発生がほとんど見られなかった。3か所の誘殺数の合計は5,079頭であり、昨年と比べ2,865頭の減少となった。

オオタバコガとハスモンヨトウの誘殺数について、毎週調査後に希望する生産者あてに電子メール配信による提供を行った。また、川崎市ホームページで発生消長のグラフの掲載を行い、適正な防除時期について市内生産者あて発信を行った。

今後も、発生消長の調査及び生産者への情報提供を継続していきたい。

## 2 ダイコンにおける対抗植物(マリーゴールド:エバーグリーン)を利用したセンチュウ防除試験栽培について

環境保全型農業推進の一環としてダイコン栽培において対抗植物であるマリーゴールド‘エバーグリーン’を用いたセンチュウ防除効果の持続期間を調査する。

(結果)

昨年度と同一試験ほ場で昨年度と同様に大根を栽培した結果、センチュウ被害株率及び被害度は、平成27年8月にマリーゴールドのすき込みを行った区（以下、試験区とする。）では、センチュウ被害株率100%、被害度70であった。センチュウに対する防除を行わずに栽培を行った区（以下、対照区とする。）ではセンチュウ被害株率100%、被害度55であった。昨年度の結果は、試験区ではセンチュウ被害株率が5%、被害度は1.25、無防除区ではセンチュウ被害株率45%、被害度15であった。昨年と異なり、両区にセンチュウの被害が見られた。よって、当ほ場でのマリーゴールドの防除効果は3年間有効であり、4年目には見られなくなることが分かった。

また、今年度も昨年度と同じ生産者に協力を頂き、多摩区と宮前区にて実地調査を行った。結果は、多摩区ほ場ではセンチュウ被害株率が40%、被害度が15であり、宮前区ほ場ではセンチュウ被害株率が40%、被害度が10であった。昨年の結果は、多摩区ほ場ではセンチュウ被害株率及び被害度はどちらも0であり、宮前区ほ場ではセンチュウ被害株率が100%、被害度が65であった。多摩区生産者に今年の栽培について聞き取りを行ったところ、昨年と比べて手が回らずに、雑草を生やしてしまったとのことであった。マリーゴールドの防除効果は雑草の根があると低下することが知られており、防除効果を期待する場合は、雑草の適切な管理を併せて指導を行う必要があると考えられた。

## 3 生分解マルチを用いたサツマイモの栽培について

近年、環境負荷低減と省力化の観点から、生分解性資材等の活用が求められているため、今回生分解性マルチをサツマイモ栽培に供試し、栽培に与える影響を調査したので報告する。

(結果)

生分解性樹脂系フィルムマルチを使用した区（以下、試験区とする。）と、通常のポリエチレンフィルムマルチ（以下、対照区とする。）を使用した区に分け、サツマイモ‘べにはるか’の栽培を行い、芋の収穫個数、芋長（cm）、芋径（cm）、芋1個当たりの重量（g）を調査した。

結果については、試験区では、芋の収穫個数が77個、平均芋長18.3cm、平均芋径3.3cm、芋1個当たりの平均重量123.4gであった。対照区では、芋の収穫個数が44個、平均芋長15.6cm、平均芋径2.7cm、芋1個当たりの平均重量78.4gであった。

試験区では対照区に比べサツマイモの収量が上がり、個々のサツマイモも大きく、太いものが収穫できた。また、収穫数が少なかった対照区では、株を掘りあげたところ、芋がついておらず、そのまま腐っている株が

多く見られた。原因の一つとして、昨年の8月や10月は例年に比べ降雨が多く、通常のマルチでは、水分が逃げにくく、土壌が過湿状態になってしまったためと考えられる。一方、生分解マルチでは、栽培中に徐々に崩壊することにより、地表が露出し、水分が逃げやすい状態になったため、過湿状態を避けることができたと考えられた。

また、生分解マルチは収穫時にはほぼ分解が進んでいた。このため、収穫後に残渣と併せて埋め立てや、鋤きこみといった処分が可能であり、処分にかかる労力や処分費を大幅に削減できると考えられる。

普及への問題としては、生分解性マルチは通常のマルチに比べ高価であるため、生産コストがかさんでしまうことや、使用せずにいると、製品が劣化し、分解が始まるので、1年で使い切ることが推奨されている等、扱い辛さが問題となっている。このため、購入費用について一部助成を行ったり、産地で共同利用する等の工夫が必要であると考えられる。

今年度の試験では、通常のマルチよりも収量が上がった。しかし今年の天候は例年と比較し特徴的であったため、平年並みの気候の場合でも、同等以上の収量が得られるか、継続して調査を行う必要がある。

#### 4 極早生タマネギの品種特性調査について

極早生タマネギの有望品種検討のため、‘浜笑’、‘春一番’、‘スーパーこがね’、‘トップゴールド’、‘愛知早生白玉葱’について夏まきトンネル栽培における品種特性を調査した。

(結果)

8月中旬、9月上旬の2回に分け上記5品種を播種、10月上旬に9515黒マルチを用い定植、11月上旬にユースラックカンキ2号用いて栽培を行った。収穫時に、収穫日、球径(cm)、球高(cm)、結球重量(g)、収穫物規格別割合(%)の調査を行った。

8月19日に播種した場合、球径及び結球重の値が大きいのは‘浜笑’であった。次いで、‘春一番’と続いた。‘トップゴールド’については、球の肥大がうまく進まず、M級以上のものは収穫できなかった。

9月1日に播種をした場合、球径及び結球重の値が大きいのは‘スーパーこがね’となった、次いで‘愛知早生白玉葱’であり、2L(球径8cm以上)率についても高かった。ただ、‘愛知早生白玉葱’は、球径が大きくなる一方、球高が低い極端な扁平形をしているため、実際の可食部に関しては他品種と比べ少ないと考えられる。また、全ての品種において、播種日による収穫日の変化はあまり見られず、4月上旬から中旬にかけての収穫となった。

以上の結果を踏まえ、8月中旬播きでは‘浜笑’と‘春一番’、9月上旬播きでは‘スーパーこがね’が有望であると考えられた。

今後にも有望品種選定と併せて、供試する被覆資材等を再検討することで、タマネギの需要が高まる2～3月への収穫の可能性について、継続して調査を行っていく。

#### 5 夏まきキャベツの品種特性調査について

夏まきキャベツの有望品種検討のため、‘あまだま’、‘湖水’、‘冬藍’、‘よしき’について夏まき露地栽培における品種特性を調査した。

(結果)

8月上旬に播種、9月上旬に定植を行い、翌年3月上旬に収穫を行った。収穫時に、各品種10株について、結球重(g)、球高(cm)、芯長(cm)、芯径(cm)の計測し、平均値の比較調査を行った。

収穫時の平均結球重の値が一番高かったのは‘湖水’の1,439gであった。次いで‘よしき’が1,435g、‘あまだま’の1,349gと続き、一番軽かったのは‘冬藍’の1,064gであった。球高は‘湖水’の14.4cmが一番高く、‘あまだま’は14.3cm、‘よしき’は12.2cm、‘冬藍’は11.1cmであった。芯長は各品種6cm前後、芯径は3cm前後であった。

今年度の天候は、定植後の10月から天候不順が続き、冬は例年と比較し気温が低い日が多く、二度の大きな降雪に見舞われた。全国的に葉菜類が不作であり、当ほ場においても全体的に小玉であった。その中でも‘湖水’と‘よしき’は低温期でもよく肥大した。また、‘よしき’については、‘湖水’と比較して収穫時の結球重のばらつきが少なく、安定した大きさのものを収穫できたため、夏まき厳冬期収穫の直売向きの品種として有望であると考えられた。

今後は今回検討した晩生向きの品種特性を踏まえ、品種の検討を引き続き行っていく。

#### 6 有効積算温度を利用したナシヒメシクイの発生予測について

ナシの重要害虫であるナシヒメシクイの適期防除に資するため、農林水産省果樹試験場興津支場で考案さ

れた有効積算温度の簡易な算出法“三角法”を利用した発生予察を行い、フェロモントラップによる誘殺数と比較することで、ナシヒメシンクイの発生消長及び防除適期を検討し、生産者へ情報提供を行った。

(結果)

有効積算温度に基づき、ナシヒメシンクイがナシの果実を加害する7月以降の発生ピークを推測し、防除適期を7月10日頃及び8月10日頃として、生産者へ情報提供を行った。情報提供にあたっては、セレサ川崎農業協同組合果樹部を通じた連絡方法に加えて、農業技術支援センターから生産者へ直接メール配信する方法を併用した。平年と比較して、ナシヒメシンクイの発生は、4～5月の世代はやや多かったが、7～8月の世代は少なく、ナシの果実への被害は少なかった。“三角法”でナシヒメシンクイの発生ピークを推測し、防除適期について情報提供することにより、不必要な農薬散布を減らし、環境負荷を軽減することが期待できる。今後も、発生予察及び生産者への情報提供を継続して実施し、適切な防除につなげていきたい。

## 7 ナシ赤星病の発生予察について

ナシの重要病害である赤星病の適期防除に資するため、農業技術支援センターの発生予察樹(カイツカイブキ)上の冬孢子堆を観察し、赤星病菌の小生子の飛散状況及び防除適期を検討し、生産者へ情報提供を行った。

(結果)

平成29年は、サクラの開花が東京都心で平年より5日早く、赤星病菌の小生子も早くから飛散すると予想されたが、4月前半にやや寒い日が続いたこともあり、小生子は4月後半から本格的に飛散したと考えられた。4月17日には、まとまった降雨で冬孢子堆が膨潤し、気温も20℃近かったことから、小生子が多数飛散したと考えられた。その後、4月22日の降雨によって小生子が飛散し、今年の感染期は終息したと考えられた。平年と比較して、赤星病の発生は少なかったが、適期防除が行えなかった園では、実害がない程度で病斑が散見された。予察情報の提供は、昨年と同様に4回行った。情報提供にあたっては、セレサ川崎農業協同組合果樹部を通じた連絡方法に加えて、農業技術支援センターから生産者へ直接メール配信する方法を併用した。今後も、発生予察及び生産者への情報提供を継続して実施し、適切な防除につなげていきたい。

## 8 カメムシの発生予察について

ナシやカキ等の果樹の重要害虫であるチャバネアオカメムシの適期防除に資するため、フェロモントラップによる誘殺数に基づいた発生予察を行い、チャバネアオカメムシの発生消長及び防除適期を検討し、生産者へ情報提供を行った。

(結果)

チャバネアオカメムシは、4月末から捕殺されるようになり、その後6月下旬から7月中旬に捕殺数が増加したが、ナシへの被害はほとんど認められなかった。また、8月以降の捕殺数は低めに推移したが、カキへの被害がやや多く認められた。平成29年の捕殺数は、595頭であり、昨年より474頭少なかった。一般的に、カメムシの発生は1年ごとに増減を繰り返すといわれ、今年の発生は、少ないと予想されていたとおり、注意報を発令するほどの大発生は見られなかった。今後も、発生予察及び生産者への情報提供を継続していきたい。

## 9 ナシ花粉採取事業及び貯蔵事業について

多摩川ナシの生産安定と品質向上を図るため、セレサ川崎農業協同組合との共同事業として、花粉の採取及び冷凍貯蔵を実施した。

(結果)

平成29年(平成29年3月31日～4月18日受付)の花粉の採取量は、65件4,395ccであり、交配可能面積として10.6ha分を取り扱った。そのうち、平成30年交配用の花粉として52件を冷凍貯蔵したが、貯蔵時(平成29年4月)の平均発芽率は83.6%、返却時(平成30年3月)の平均発芽率は79.7%であった。近年は、栽培面積の減少、開葯機の個人導入、中国花粉の購入等のため、花粉の採取量はやや減少傾向にあるが、今後も、セレサ川崎農業協同組合と協力しながら継続して実施し、多摩川梨の安定生産と品質向上につなげていきたい。

## 10 溶液受粉用液体増量剤「花みらい」を用いたニホンナシの溶液受粉について

ナシの受粉作業は、短期間に多大な労力を要するうえに、降雨等により花が濡れた状態のときは作業することができない。作業が省力化でき、天候の影響を受けにくい溶液受粉技術が期待されている。そこで、白石カルシウム株式会社が開発した溶液受粉用液体増量剤「花みらい」を用いた人工授粉について調査検討を行った。

(結果)

試験区では、純花粉1gを「花みらい」200mlに溶かした溶液をハンドスプレーで噴霧し、対照区では、純花

粉を増量剤「石松子」で5倍に希釈したものを梵天を用いて受粉した。

純花粉及び溶液中の花粉の発芽率は、それぞれ 50%及び 40%であり、いずれも低かった。試験区では、純花粉は溶液中に均一に分散し、ハンドスプレーの目詰まり等もなく、作業性は良好であった。

予備摘果時の着果率は、幸水では試験区のほうがやや低く、豊水では、試験区のほうがやや高かったが、いずれも十分な着果率であった。花粉の発芽率は低めではあったが、着果率から判断して、確実に受粉が行えたものと考えられる。

収穫時の幸水は、試験区のほうが果実重はやや軽く、果形は不整形であり、完全種子数は少なく、糖度はやや低いようであったが、商品性から鑑みて両区に大きな差異は認められなかった。また、収穫時の豊水は、試験区のほうが果実重は重く、果形は整形になり、完全種子数はやや少なく、糖度は高いようであったが、商品性から鑑みて両区に大きな差異は認められなかった。

以上の結果から、溶液受粉用液体増量剤「花みらい」を用いた溶液授粉は、降雨直後の花が濡れた状態のようなときに、受粉作業の補助的技術として有効であると考えられる。ただし、そのような条件下で受粉作業を行った場合の着果率については、本試験では調査検討を行っていないため、さらなる調査が必要である。

## 11 溶液受粉用液体増量剤「溶液の素」を用いたニホンナシにおける溶液受粉について

ナシの受粉作業は、短期間に多大な労力を要するうえに、降雨等により花が濡れた状態のときは作業することができない。作業が省力化でき、天候の影響を受けにくい溶液受粉技術が期待されている。そこで、株式会社ミズホケミカルが開発した溶液受粉用液体増量剤「溶液の素」を用いた人工授粉について調査検討を行った。

(結果)

試験区では、純花粉 1g と溶液の素 11g を混合し、精製水 200ml に溶かした溶液をハンドスプレーで噴霧し、対照区では、純花粉を増量剤「石松子」で5倍に希釈したものを梵天を用いて受粉した。

純花粉及び溶液中の花粉の発芽率は、それぞれ 45%及び 25%であり、いずれも低かった。試験区では、純花粉は溶液中に均一に分散し、ハンドスプレーの目詰まり等もなく、作業性は良好であった。

予備摘果時の着果率は、幸水では試験区のほうがやや低く、豊水では試験区のほうが高かったが、いずれも十分な着果率であった。花粉の発芽率は低めではあったが、着果率から判断して、確実に受粉が行えたものと考えられる。

収穫時の幸水は、試験区ほうが果実重はやや軽く、果形は不整形であり、完全種子数はやや少なく、糖度はやや高いようであったが、商品性から鑑みて両区に大きな差異は認められなかった。また、収穫時の豊水は、試験区のほうが果実重は重く、果形は整形になり、完全種子数は少なく、糖度はやや高いようであったが、商品性から鑑みて両区に大きな差異は認められなかった。

以上の結果から、溶液受粉用液体増量剤「溶液の素」を用いた溶液授粉は、降雨直後の花が濡れた状態のようなときに、受粉作業の補助的技術として有効であると考えられる。ただし、そのような条件下で受粉作業を行った場合の着果率については、本試験では調査検討を行っていないため、さらなる調査が必要である。

## 12 ナシうどんこ病の環境保全型防除について

ナシの重要病害の一つにうどんこ病が挙げられる。うどんこ病に対して登録のある殺菌剤は、殺菌剤耐性菌対策委員会 (FRAC : Fungicide Resistance Action Committee) による殺菌剤の作用機構分類に基づく同一グループの薬剤が多く、殺菌剤の連用による薬剤耐性菌の発生が危惧されている。そこで、還元澱粉糖化物が有効成分であり、日本農林規格 (有機 JAS) に適合しているエコピタ液剤を用いたうどんこ病の環境保全型防除について調査検討した。

(結果)

試験区では、エコピタ液剤 100 倍 + エクシレル SE 5,000 倍を散布、対照区では、オーシャイン水和剤 3,000 倍 + エクシレル SE 5,000 倍を散布し、それぞれ防除直前及び防除後 12 日目の発病度を比較した。

試験区及び対照区ともに、うどんこ病は平年と同程度に発生しており、防除直前の発病度は 55 前後であった。防除後もうどんこ病の発病を完全に抑えることはできなかったが、防除後 12 日目の発病度は試験区のほうがやや低かった。なお、試験区及び対照区ともに、ナシの葉等に葉害は認められなかった。また、エコピタ液剤は、調整時にやや泡立ちが認められたものの、臭いや防除器具の汚れもなく、扱いやすい薬剤であると感じられた。

エコピタ液剤は、有効成分が還元澱粉糖化物で高い粘性を有し、うどんこ病菌の孢子や菌糸を被膜して孢子の飛散及び発芽、菌糸の伸展を阻害することで防除効果を発揮するため、発病前に散布しても予防的な効果を得ることはできないが、多発後に散布しても防除効果が劣るようである。物理的な防除作用ゆえに薬剤耐性の

発達の恐れが低いと、防除体系に組み込むことで薬剤耐性の回避につながることを期待できる。また、日本農林規格（有機 JAS）適合資材で特別栽培農産物への使用も可能であり、環境保全型農業の取り組みに活用できる資材であると考えられた。

エコピタ液剤の普及にあたっての課題としては、慣行防除と比較して高価であることが挙げられる。しかし、ナシの難防除害虫であるハダニ類にも適用があることから、防除時期等を含めた効果的な使用方法について、さらに調査検討が必要である。

### 13 切り花用ヒマワリの液肥葉面散布効果について

ヒマワリを5月に収穫する作型はチョウ目害虫の被害を受けづらく、農薬散布軽減につながるが、低温期の栽培となるため開花日数が長くなり、草丈が伸びにくい等の傾向が見られる。そこで、ヒマワリ「サンリッチバナナ50」「サンリッチマンゴー50」「サンリッチバレンシア」「サンリッチフレッシュオレンジα」「ビンセントネーブル」「ビンセントポメロ」を対象に低温期でも栽培可能な有望な品種を検討するとともに、高機能液肥を散布することで、ヒマワリの品質を向上させられるか調査した。

(結果)

「サンリッチマンゴー50」「サンリッチフレッシュオレンジα」「サンリッチバレンシア」は低温伸長性が優れていたが、「サンリッチマンゴー50」は開花日数が長くかかってしまったため、栽培日数を長くすれば低温期の栽培に適する品種と考えられた。「サンリッチバナナ50」や「ビンセントポメロ」は草丈が伸びにくかったが、液肥の葉面散布をすることで少し草丈を伸ばすことができた。そのため、液肥を葉面散布するとしたら低温期に栽培しづらい品種へ使用するのがよいと考えられた。今回の試験では切り花長や花径への液肥の葉面散布の明らかな効果は見られなかったが、出荷前の葉色を良くする等、他の効果も考えられるため、引き続き調査していきたい。

### 14 露地切花栽培における生分解マルチとエコネットの耐久性について

露地切花栽培では保温効果や雑草抑制のためにマルチを使用したり、倒伏防止のためにフラワーネットを用いるのが一般的であるが、その素材の多くはポリエチレン等で使用後はゴミとして片づける必要がある。一方、生分解資材は使用後に畑にそのままにしても分解されるため片づける必要がなく、省力化につながるとともにゴミの減量にもつながる。しかし分解される材質であることから、栽培期間中に品質が保てるのか懸念されるため、羽毛ケイトウの栽培において使用に問題がないか検討した。

(結果)

生分解マルチについては生育期間中劣化することなく、通常のマルチと比べ品質の低下に差はなかった。また、マルチをはがす際、通常のマルチは土の中に切れ端が残るなど回収に手間がかかったが、生分解マルチはそのまま置いておくと分解され、なくなった。生分解マルチも色々な種類（有孔・無孔など）があるため、それぞれの用途に合ったものでも遜色なく使えるか今後も検討する必要がある。

フラワーエコネットについてはある程度ケイトウが大きくなると重さに耐えられずにネットが切れたり、支えきれず倒伏したところもあった。またフラワーネットを設置する際もテンションをかけづらく、張るのにも技術が必要だった。通常のネットでは損傷等は見られなかった。

フラワーエコネットはケイトウの倒伏防止では強度が足りなかったため、ケイトウ（茎径1cm程度）と同等の大きさになるヒマワリ、コギク等でも使用は難しいと思われるので、市内で生産されている露地切花への普及は難しいと考えられた。

### 15 夏咲コギクの生育特性調査について

お盆に合わせた出荷が可能な夏咲コギクについて検討するため、有望と考えられる6品種（7月咲桃色在来、7月咲黄色在来、「風鈴」、「まこと」、「しらかば」、「あすか」）を対象に生育特性を調査した。

(結果)

生育の良否、開花時期、切花の品質等について調査した結果、7月咲桃色在来、7月咲黄色在来は開花が早く7月のお盆には合わなかった。「風鈴」は揃いもよく7月のお盆出荷に相当であると考えられた。また、「まこと」「しらかば」「あすか」は8月のお盆より開花が早かった。「あすか」は草丈が伸びやすく倒伏しやすいため、栽培管理上手間がかかった。今後は摘芯する等7月、8月のお盆に開花を合わせるような技術面の工夫が必要だと考えられた。

### 16 シクラメン栽培における亜リン酸肥料の施用効果について

シクラメン栽培において元肥にリン酸質肥料を施すと芽数が増えると言われており、多くの生産者は元肥にリン酸質肥料を施用しているが、その多くは重焼リン等の「正リン酸」と呼ばれるものである。近年、正リン酸に比べて酸素が1つ少ない亜リン酸肥料が販売されており、作物に対する施用効果が正リン酸とは異なると言われていたため、シクラメンにおいても亜リン酸肥料の施用効果として知られている品質向上や花数の増加等の効果が見られるのか調査した。

(結果)

元肥に使用する重焼リンの一部を亜リン酸に置き換える形で試験を行った結果、芽数についてはパステルシュトラウスでは重焼リン4 g/L入れた区が芽数の平均が4.7個と一番多くなり、パステルシューベルトでは亜リン酸5 g/L+重焼リン15 g/L入れた区が芽数の平均が5.4個と一番多くなった。一方いずれの品種も無施用区が一番芽数の平均が少なくなり、亜リン酸4 g/L入れた区が次に少なくなった。これは相対的なリン酸含量が他の区と比べて少なかったためと考えられる。

葉枚数についてはいずれの品種でも亜リン酸2 g/L+重焼リン2 g/L入れた区が最終的に一番多くなっていた。

リン酸に芽数を増やす効果があることは今回の試験から確認できたが、亜リン酸の施用と無施用では明らかな差は見られなかった。また、今回の試験では使用した重焼リン2号と亜リン酸粒状1号でリン酸含量に差があり、それぞれの試験区でリン酸含量が異なっていたこともあり、今後は総リン酸含量を揃えた中で試験を行うことも必要だと考えられたため、引き続き正リン酸と亜リン酸のバランスを変えながら効果を検証していきたい。

## 17 シクラメン栽培における排水分析・汁液分析値を用いた施肥管理について

シクラメン栽培において、排水分析値及び汁液分析値を用いた施肥管理方法を確立するため、市内シクラメン生産者の協力を得て、排水及び葉柄汁液の肥料成分濃度の経時的変化について、生育期間を通じて調査した。

(結果)

排水の硝酸態窒素濃度、pH、EC及び葉柄汁液の硝酸態窒素濃度について分析を行い、総合的に肥料の過不足や生育状態を把握することができた。また、過去3年分の排水分析結果と過去2年分の汁液分析結果をグラフにして生産者へ随時情報提供することにより、施肥管理の指標として活用することができた。また、植替えによる肥料成分濃度の変動を抑制することや夏場に肥料成分濃度を低く管理することにより、根痛みや病気による株の枯死が軽減されることが示唆された。汁液分析については神奈川県での適正範囲の基準がないため、群馬県で使われている基準を参考にしているが、本市では気象条件も異なっているため、本市での適正範囲を把握する必要がある。次年度以降も引き続き排水・汁液の硝酸態窒素濃度を調査し、データを蓄積することで本市の適正基準を明らかにしていきたい。

## 18 平成29年度土壌分析結果について

市内露地野菜、施設野菜、果樹等の生産基盤である土壌等について、化学性の分析及び診断指導を行った。

(結果)

区分	露地野菜	施設野菜	果樹	花き*	その他	養液分析	計
件数	590	79	124	434	0	98	1,325

\* 花きにはシクラメンの排水分析326件を含む。